

作目名	だいこん
-----	------

作型名	秋冬どり(平坦地)
-----	-----------

月 旬 作型	1			2			3			4			5			6			7			8			9			10			11			12			品種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
夏まき																																					夏つかさ
秋まき																																					秋いち
																																					T424

○ は種 △定植 ■ 収穫

○技術体系設定の前提条件

(1) 対象地域

岐阜、西濃、中濃

(2) 立地条件

①気象条件

生育適温は20℃前後で、後期の根部肥大期の限界適温は23℃位である。一般平坦地の気温条件からみて、普通栽培の早播き限界期は8月中旬頃であるが、寒冷紗被覆栽培ではこれより10日早播きが可能である。

②ほ場条件

土壌は膨軟で土層の深い保水力のある沖積砂壤土、火山灰土壌に適する。高畦とし、ほ場周辺に排水溝を設ける。高温期の排水不良ほ場では内部障害が発生しやすいので、特に台風・長雨に対応できる排水対策を実施しておく。

③栽植株数(10a当たり)

6000本

(3) 目標収量(10a当たり)

6 t

○施肥基準

(1)施肥基準量 (10a当たり・kg)

施肥成分	総量		基肥	追肥						
				1	2	3	4	5	6	
窒素	化学肥料由来	14	10	4						
	有機質肥料由来									
りん酸		16	13	3						
加里		12	8	4						

【施肥設計及び施肥上の注意事項】

- 1 施肥設計にあたっては、堆肥中の有効成分を測定し、それを施肥基準から差し引き肥料の施用量を決定する。
- 2 ホウ素欠乏の発生しやすい地帯では、基肥にFTE 4～6kg、BMようりんを施用する。  
(ホウ素入り肥料を基肥として使用する場合は加減する)
- 3 pHの調整、窒素、加里の施用量等については、土壌診断に基づいて行うようにする。
- 4 温度が高く、周期的な降雨があると、地上部の生育が促進され「曲がり」の原因となるため8月中旬から9月上旬播種の施肥量はほ場によって2～4割減らす。

作型名	春どり (平坦地)
-----	-----------

月旬	1		2		3		4		5		6		7		8		9		10		11		12		品種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
ハウス	~~~~										~~~~												優等生		
年内まき	~~~~										~~~~														
大トンネル	~~~~										~~~~												春仙人 (桜風)		
年内まき	~~~~										~~~~														
大トンネル	~~~~										~~~~												T452 (優等生)		
年明まき	~~~~										~~~~														
トンネル	~~~~										~~~~														

○ は種    ■ 収穫    🏠 ハウス    🌳 大トンネル    🌳 トンネル    ~~~~ ベたがけ

○技術体系設定の前提条件

(1) 対象地域

岐阜、西濃、中濃

(2) 立地条件

①気象条件

生育適温は20℃前後で、後期の根部肥大期の限界適温は23℃位である。13℃以下の低温に一定期間遭遇すると花芽分化を起し抽苔する。一方20℃以上の高温は低温による影響を打ち消す作用がある。こうした生態特性から、は種後15日間の平均気温を、ハウス・トンネル栽培では20～25℃以上保つことが必要である。

②ほ場条件

土壌は膨軟で土層の深い保水力のある沖積砂壤土、火山灰土壌に適する。砂質土壌が最も良く適応する。高畦とし、ほ場周辺に排水溝を設ける。土壌水分の保持、地温の維持、肥効を高めることが高品質だいこん生産のポイントである。

③栽植株数（10a当たり）

7000～8000本

(3) 目標収量（10a当たり）

7 t

○施肥基準

(1)施肥基準量（10a当たり・kg）

施肥成分	総量		基肥	追肥						
				1	2	3	4	5	6	
窒素	化学肥料由来	14	10	4						
	有機質肥料由来									
りん酸		16	13	3						
加里		12	8	4						

【施肥設計及び施肥上の注意事項】

- 1 施肥設計にあたっては、堆肥中の有効成分を測定し、それを施肥基準から差し引き肥料の施用量を決定する。
- 2 ホウ素欠乏の発生しやすい地帯では、基肥にFTE 4～6 kg、BMようりんを施用する。（ホウ素入り肥料を基肥として使用する場合は加減する）
- 3 pHの調整、窒素、加里の施用量等については、土壌診断に基づいて行うようにする。

作型名	夏どり (高冷地)
-----	-----------

月 旬 作型	1			2			3			4			5			6			7			8			9			10			11			12			品種
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	
夏どり																																					はるいち
																																					夏つかさ
																																					YRてんぐ
																																					ひるがの耐病

○ は種    ◻ 収穫

○技術体系設定の前提条件

(1) 対象地域

中濃、飛騨、東濃

(2) 立地条件

①気象条件

冷涼な気候を好み、標高600~1000m (8月上旬の平均気温20~23℃) では、盛夏を通じた栽培で良品を生産できるが、標高500~600mでは、8~9月出荷は不安定である。は種後の低温感応で抽苔するので、品種ごとに早まき限界に留意する。12℃以下の低温に一定期間遭遇すると花芽分化を起し抽苔する。従って、は種後15日間の平均気温が、ハウス・トンネル栽培では20~25℃、最低気温12℃以上に保つことが必要である。

②ほ場条件

排水良好で耕土の深い肥沃な畑地を選ぶ。深耕と併せて堆肥を秋施用し、膨軟な土壌とする。土壌pHの範囲は、5.5~6.8で酸性には強いが、苦土とほう素の欠乏に最も敏感に反応するので、土壌調査に基づいて苦土石灰又は炭カルを施用し、FTE又はほう素入り化成肥料は毎作施す。

③栽植本数 (10a当たり)

5, 000本

(3) 目標収量 (10a当たり)

5 t

○施肥基準

(1) 施肥基準量 (10a 当たり・kg)

施肥成分	総 量		基 肥	追 肥					
				1	2	3	4	5	6
窒 素	化学肥料由来	9.6	9.6						
	有機質肥料由来	6.4	6.4						
りん 酸	36		36						
加 里	14.8		14.8						

【施肥設計及び施肥上の注意事項】

- 1 施肥設計にあたっては、堆肥中の有効成分を測定し、それを施肥基準から差し引き肥料の施用量を決定する。
- 2 堆肥を10 a 当たり4 t 秋に施用し、プラウ耕により深耕する。
- 3 開墾地では土壌調査を行い、酸度 (p H) 矯正とりん酸の改良を行う。
- 4 施肥量は熟畑を基準としているので、開墾地では基肥を20~30%増施し、また追肥を加える。
- 5 トンネル栽培及び土壌消毒畑では20~30%減肥し、追肥も生育に応じて加減する。